# 世界の窓が全開ですよ

雨月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
世界の窓が全開ですよ

【Ｎコード】
Ｎ２２２５Ｙ

【作者名】
雨月

【あらすじ】
彼の名前は新戸風太郎。探せば世界に三人ぐらいは似ている人がいるといわれる高校二年生の生徒会長である。二学期の初日、彼は久々に友人に出会うのだった。

# 第一話：一陣の風

第一話

俺の名前は新戸風太郎。羽津高校に通う高校二年生である。実年齢と彼女いない歴が一緒という世間一般的な男子生徒だと自分では思うわけだ。いや、もしかしたら全校生徒中の約半数が心のどこかで俺の事を好きかもしれないと言う確率は無きにしも非ず……まぁ、こんな情けない感じだが、一応生徒会長をしているのだ。

今日から高校二年生二学期が始まる。中だるみにならないようにしろとのお達しが夏休み前に先生から出ていたものだが、勉強合宿やらなんやらで俺の夏休みは一カ月もなかった。

「おっかしいなぁ」

いつもポストに入っているはずの手紙が今日は来ていなかった。他の郵便物は来ているから郵便配達のおっさんが遅れていると言うわけでもないはずである。まぁ、目的の物が入っていないのならそれはそれで構わない。文通相手への返事が面倒だからである。

ちょっと心配になりつつも、俺は学校へと行くことにした。

二学期一発目という事もあり半日で学校は終了。生徒会も明日からだし、今日は遊んで帰ろうかしらと下駄箱を乱暴に開けてみた。

「あん？」

靴の上に一通の手紙が置かれている。

『拝啓、新戸風太郎様。本日の放課後、生徒会室にて待っています。』

女の子らしい文字、俺は念のため鼻を近づける。

「くんくん……女の子の匂いだな。きっと俺の事を生まれる前から好きだったに違いない。男の匂いは一切しないしクラスの連中の仕業でもなさそうだ」

俺にもね、好きな人の一人や二人はいるものさ。でもなぁ、一人はこの高校にいるとばかり思っていたら海外に行って行方知れずだ

し、もう一人は転校してしまったんだよ。思いも伝えられないへたれ野郎と罵るがいいさ。
　さて、それはそれ、これはこれである。女の子を待たせるのは古来より悪いものだと俺は親父に教わっている。近くの男子トイレへ入って寝癖を一生懸命押しつける。第一印象がいいように身だしなみチェックを怠ってはいけない。
「……寝癖があるのはぐっすり眠れたって事だ」
　去年から使用している生徒会室へと足を向ける。『男の園』と呼ばれし俺の牙城はその名の通り全員男子生徒（イケメン、体育会系、文系、理系、なんちゃってチャラ男等）で構成されている為副生徒会長、あるいは書記長の女子と淡い恋物語を想像していた俺はショックだ。
「あ、あの、生徒会長……私、生徒会長の事が好きで生徒会に入ったんです。副生徒会長、がんばりますっ」
　しつこいが、こんな甘い展開は一切ない。副生徒会長も友人の男子生徒でがっかりである。
　もう少しで生徒会室と言うところで副生徒会長に出会った。
「新戸君ではないですか。遅かったですね」
　眼鏡の秀才、中州秀作が俺を見上げるようにして首をかしげる。
「中州、お前まだ帰ってなかったのか？」
「ええ、ちょうど新戸君を呼びに行ってから帰るつもりでした」
「俺を呼ぶ？先生か？校長か？はたまた写真撮っていたのがばれたソフト部の部長にか？」
　いい尻だった。今度はテニス部にカメラを持って行こうかなと思う。
「いえ、手紙を渡していると言っていたのですがもらっていないのですか？」
「ああ、手紙ならもらった」
　俺がそう言って手紙を見せる。それに触ろうとしたものだから歯をむき出して威嚇すると意外そうな顔をして手を引っ込めた。その

後、中州は一度頷いて手を振ってくる。
「それなら話は早いですね。僕はもう会ってきましたから失礼します」
「気を付けて帰れよ」
「ええ、気を付けて帰ります」
中州が廊下の角に消えてそこで首をかしげてしまった。
「ん？あってきた……ってどういうことだ？」
まさか、俺にラブレターを渡してくれた相手は中州の方にも同じようなラブレターを？いや、しかし、中州には許嫁という古臭くも一度はあこがれるような相手（母親に確認したところ、俺には許嫁はいなかった）がいるから大丈夫だろう。
いや、待てよ？そういえば今日の朝、手紙が来てなかったな。そして、放課後手紙が来た。
改めて手紙を見てみる。
「……まさか、な」
頭の中にぽっくり浮かんでいた一つの可能性を即座に打ち消し、それでも時間を確認する。
「……あたっていたとしたらそろそろ許容範囲ぎりぎりか」
時間にうるさい相手の為廊下を走り、急いで生徒会室前へ。その前で俺はもう一度身だしなみをチェックしてオーケーを出す。
軽く扉を開けると、当然ながら生徒会委員は一人もいない。
だが、一人の比較的小さな女子生徒が立って俺を迎えてくれた。
「新戸生徒会長、お久しぶりです」
きっと、今の俺の顔を見たら誰もが『まるでアヒルだった』と言ってくれるだろう。そうさ、俺はいつだって醜いアヒルの子。

## 第一話：一陣の風（後書き）

チャック全開ですよ、とはまた違う話です。続編じゃないですね、はい。本来は一つの作品にまとめられるべき話だったのですが、諸事情によりあちらは生徒会長の話でまとめた（つもり）ということになっています。前作が微妙だったのでこちらはそれなりに頑張ろうと思います。

## 第二話：マイフレンド

第二話

男の牙城、女子生徒たちからは〇の穴と呼ばれている生徒会室に少し身長の低い女子生徒が立っていた。

「倉山千穂……」

ついフルネームを口にしてしまう。

「お久しぶりです」

少々、相手も緊張しているようだった。

俺が中学の生徒会長だった頃、千穂は副生徒会長だった。ちなみに中州は書記長である。

俺が黙っていると千穂は首をかしげた。

「もしかして身体の具合でも悪いのですか？」

「そんなわけないだろ。久しぶりにあったから驚いているだけだよ」

「そうですか。それなら問題ないですね。椅子があるので新戸先輩、座ってください」

此処は俺の牙城のはずである…はずなんだけどなぁ。有無言わさない口調だからしょうがない。ここで嫌だとか否定的な態度を取ると面倒な事が起こる。

千穂の対面に座り、俺はため息をついた。

「やはり、高校の生徒会長というものは中学の生徒会長よりも大変なのですね」

「え？」

「ため息が出ていたのでそう思いました」

「あ、ああ……まぁ、そんなもんだ」

まさか千穂がいたから…なんて言えないな。

「それで、お前なんでここにいるんだよ？ああ、もしかしてまだ夏休みだから会いに来てくれたのか？」

「いえ、違います」

もうさ、この時点で鈍くない俺はなんで此処にいるのか気付いていたよ。でも、認めたくないって言う気持ちの方が大きいのよ。
「あ～じゃああれだな。こっちの近くにたまたま寄っただけか？そうなんだろ？」
「いえ、こちらにまた引っ越してきたのです」
ほーらね、やっぱりだ。俺の嫌な予感って言うのは素っ裸で警察署に行ったら捕まるのと同じくらいの確率で当たる。
「あ、あ～……そうなのか」
「ええ、そうです」
「そうか…」
俺の対応に千穂は首をかしげていた。
「……私はこうしてまた新戸先輩や中州先輩に会えたりした事が嬉しいのですが新戸先輩はそうではないのですか？」
「ああいやいや、嬉しいぞ、うん、嬉しいけど気持ちの整理が出来ていないからちょっと驚きの方が大きいだけだ。ところで、家の方はまた前と同じ場所なのか？」
中学校の隣に家があった。夕飯に呼ばれる事も稀にあったが、千穂の親もちょっと相手したくない部類ではある。
「いえ、違います」
「もしかして高校の隣か？」
それならまぁ、千穂らしいと言えるんだけどな…
「いえ、新戸先輩の家の隣です」
もし、俺の家の隣なんて言われた日には…
「あれ、悪い、聞きとれなかったからもう一度教えてくれないか？」
「はい、新戸先輩の家の隣に引っ越してきました」
きっと、俺の前世は神と敵対していたのだろう。だから、神様は俺に対してこうも悪い状況をセッティングしてくるのだ。そういえば昨日の深夜に隣に車が止まったような気がしないでもなかったからなぁ。
「そ、そうか…あ、じゃあとりあえず帰るか？」

「はい」
その日の夕方、俺の家に倉山家が挨拶にやってきた。
「お隣に引っ越してきた倉山です」
「御無沙汰してます」
「こちらに帰っていらしたんですね」
両親が懐かしそうに話しこんでいる中、俺は隣で固まっている愛夏を見てそっと肩に手を置いた。ちなみに、愛夏は俺の妹ではない。親戚で、俺の妹分みたいなものだ。世界一周に両親が旅だった為、こちらに居候している。
「あ、兄貴…倉山って…」
「ああ、お前の想像している通りだ」
「よ、よかったねー、兄貴。お目付役がいなくて寂しかったんじゃないの？」
「ははぁ、俺だけじゃなくてお前のお目付け役って感じもするんだよなぁ」
「風太郎君、久しぶりだね。ちょっと話をしようじゃないか」
「あ、はい」
千穂父に呼ばれて俺は前へと移動する。愛夏はすぐに引っ込んだ。
「今度ぜひ、夕飯を一緒に食べようじゃないか」
「はい……近いうちに必ず…」
「ああ、千穂の事をよろしく頼むよ」
「え、ええそれはもちろんです」
受け答えが面倒だから呼ばれたくないんだけど、いずれまた呼ばれるんだろうな。
でもまぁ、宿命ってやつなのか俺が呼ばれたのは次の日だったりする。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2225y/

世界の窓が全開ですよ

2011年11月7日09時05分発行